

哲学の共同実践としての対話

——「哲学カフェ」の意義についての一考察——

越 門 勝 彦

1. 哲学カフェの起源
 2. 哲学カフェの実際の様子
 3. なぜカフェなのか？
 4. 公共的対話の場としての哲学カフェ
 5. 参加者は議論から何を得るのか
- 終わりに

1. 哲学カフェの起源

日曜の午前、多くの人が一斉にカフェに集まってきて、互いに挨拶を交わし談笑している。そのうち一人がマイクを手手に会合の始まりを告げる。そして皆に問いかける、今日のテーマは何するか、と。数人がマイクを要求し、それぞれテーマを提案し、なぜそのテーマについて論じたいのかを説明する。そこで挙げられたテーマは、「科学は神の観念と両立しうるか」、「近隣諸国との歴史認識の共有は可能か」など多岐にわたる。最初にマイクを手にした人物がテーマを決定すると、一人、また一人と、そのテーマに関する自らの考えを語り始める……。

これは、毎週日曜日、パリのバスティーユ広場に面したあるカフェで繰り広げられる「哲学カフェ café-philosophique」の光景である。ここで言う哲学カフェとは、飲み物を片手に哲学的な議論をかわす社会的実践であり、特定の施設の名称ではない。

こうした議論様式の起源は、1992年にパリでマルク・ソーテが始めた活動に遡る。ただし、このスタイルは、偶然の産物だった。当時ソーテはパリのマレ地区に「哲学相談所 cabinet」を開設し、そこで、個人を相手に、有料で不安や悩みの相談を受け付けていた。そして、出演していたラジオ番組内で、相談所での対話を毎週あるカフェで友人たちに報告しているのだと話したところ、ソーテがそのカフェで議論の相手を待っているものと思いだりリスナーが集まり、現行の形での議論が始まったのである¹。「相談所」は1980年代にすでにドイツやオランダで試みられていたが、

¹ マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』（堀内ゆかり訳、紀伊國屋書店、1996年）、27～28ページ

哲学カフェはこのときパリで誕生し、その後、日本やアメリカをはじめ世界各地に広がってゆく。ソーテが1996年に来日した頃には、日本でもすでに哲学カフェの試みが始まっていた。この新たな哲学的実践は、間歇的に訪れる「哲学ブーム」とは異なり、現在も、東京、大阪、仙台などの各都市で続けられている。

2. 哲学カフェの実際の様子

哲学カフェの実際の様子を紹介しておこう。ここで取り上げるのは、「カフェ・デ・ファール」である。カフェ・デ・ファールは、ソーテが哲学カフェの活動を開始した場所であり、その意味では哲学カフェの発祥の地でもある。そのカリスマ性で人びとを魅了したソーテは1996年に若くして病死した。しかし、彼の死後も、複数のアニメトゥール（進行役）と熱心な参加者と共に支えられ、毎週日曜に催される議論は活況を呈している。

筆者は、2013年8月下旬、冷たい雨が降りしきるなか、カフェ・デ・ファールに足を運んでみた。議論開始の少し前に着いた時点で、すでに店内には数十名が集まっていて、その後も増え続け、最終的には50名ほどであった。この日のアニメトゥールはJean-Luc Berlet氏。参加者への挨拶に続いて、参加者に私を紹介してくださった。議論の現場に身を置いてみて感じたのは、ともかく騒がしいということである。カフェは通常営業なので、店内はスタッフや食材を届ける業者がたえず行きかっている。彼らに議論への遠慮はみじんもない。コーヒー豆を挽く機械音、食器がぶつかり合う音に加え、注文を厨房に伝えるスタッフの声が入り混じる。外は車の通行量も多い。マイクが使用されるのはそのためである。

参加者の年齢層は幅広く、20歳前後の学生もいれば、杖をついている相当に高齢の老人も見受けられた。議論への参加の仕方も多様である。書類を読みながら片手間に議論に耳を傾ける人もいれば、集中して発言に聞き入っている人、近くにいる相手と何やら小声で会話している人、独り言のようにコメントしている人もいる。全員が発言するわけではなく、発言者は10名ほどである。意見を述べる際の言葉遣いに関しても自由度が高く、自分の意見を即興の詩で表現する人もいた。議論の最中は、哲学カフェが行われていることを知らない客が次々に訪れる。驚いて去っていく人もいれば、そのまま空いた席に腰をおろして食事をとる人もいた。参加者たちの様子を見ていて最も印象的だったのは、ある発言者と、その人物が発言している間しきりに首を振り「それは違うよ」と小声でコメントするなど、常に否定的な反応を示していた別の参加者が、議論の終了後、ごく親しげに談笑していたことである。彼らの間では親しさと意見の不一致がいかにも自然に同居していて、むしろそれを楽しんでいるように思われた。

日本の哲学カフェはどうか。筆者が参加したことがあるのは、仙台で行われている「てつがくカフェ@仙台」である。カフェ・デ・ファールとの大きな違いは、場所とテーマ設定にある。仙台の哲学カフェは、図書館を兼ねた複合文化施設（せんだいメディアテーク）内部のスペースを利用している。フランスのカフェとは異なり、静寂が保たれている。飲み物は、スタッフが提供する。提

起された意見を記録していくための巨大な移動式の黒板と、参加者がアイデアを直接そこに書き付けることのできるテーブルが設置されている。テーマは、議論の当日にそのつど決めるのではなく、スタッフが話し合って事前に決定し、市報やチラシで告知している。

哲学カフェで行われる議論の一般的特徴を、[主題]、[目的]、[進行]に分けて、簡単に説明しておく。

[主題]

主題はどのように選ばれるのか。先述のように、フランスでは、議論の開始時に参加者が提案した複数の主題から一つを選ぶのに対し、つつがくカフェ@仙台では、運営スタッフが事前に決定する。

どういう主題が選ばれるのか。カフェ・デ・フェールで取り上げられたものを具体例として挙げておくと、「哲学者とは何か」、「信念や確信は疑いよりも好ましいものか」、「幸福は習得されるものか」、「人間はなぜ悪をなすのか」、「ユーモアの感覚は生きていく上で助けとなるか」、「現代において金は依存性の高い麻薬のようなものか」、などである。2010年に活動を開始したつつがくカフェ@仙台では、「〈老いる〉ってよくないこと?」、「場の空気ってなに?」、「大人になるってどういうこと?」といったテーマが論じられ、東日本大震災の後、最初に行われた2011年6月の議論では、「震災と文学 - 「死者にことばをあてがう」ということ」というテーマが選ばれた。これ以降、本カフェでは、「〈支援〉とは何か」、「震災の〈当事者〉とはだれか」など、一貫して震災に関連するテーマをめぐって議論がなされている。

以上から分かるように、哲学カフェでは、普遍的かつ根源的でありながら、同時に、日常生活とも密接に関わる主題が取り上げられる。つまり、他者とともに生きていく限り誰もが直面せざるをえない問題が論じられる。もちろん、そのときどきに起こった出来事や事件への社会全体の関心や、カフェが開催される地域の個別状況を反映したテーマを選ぶ場合もある(カフェ・デ・フェールでは、オーストリアで極右政党が議席を伸ばしたことが話題になった際、「民主主義を哲学的に容認できない場合が存在するか」というテーマが提案された。)しかし、問いのきっかけは偶然的で特殊な要因であっても、原則として、議論の内容は時代や地域に限定されない普遍的な問題へと展開していくことが目指される。

[目的]

主題の性格からも察せられるように、議論の目的は、問題解決や合意形成にはない。この点が、たとえば地方行政に関して住民間でなされる意思決定のための討議と異なる点である。そこでは特定の事柄の是非について参加者の総意をまとめ上げ、それを問題解決につなげるのが求められる。しかし、哲学カフェでは、見解の相違を積極的に捉えつつ、問題を解決・解消するというよりも、問題の深さ、つまりは解き難さを確認するところに、主眼がある。異論を説き伏せることも、哲学カフェの趣旨からは外れる。この点で、勝ち負けを競うディベートと異なる。参加者に求

められるのは、何よりも異論にしっかりと耳を傾け、その真意を推し量ることである。異なる意見をもった他者との出会いによってこそ、個々の参加者は議論から成果を得ることができるからである。ただし、合意形成や異論の論破が目的ではないとは言っても、哲学カフェは、単なるおしゃべりや放談でもない。発言者は、言葉を選び、論理的に、理由や根拠も提示しつつ、自分の考えを他者に伝える義務を負う。他の参加者は、表明された意見と自分の考えとのすり合わせを試み、合意が可能かどうかを検討する。哲学カフェの議論は、あくまで真実を見いだすための対話である。それゆえ、こうした態度が要求されるのである。

[進行]

議論には一人の「進行役」が立てられる。これはファシリテータ、あるいはフランスではアニメーターと呼ばれる。進行役の役割によって、議論の進め方は大きく二つに分けられる。

個々の発言者と進行役とのやり取りを中心に進むフランス式では、進行役は、発言者の意見に対して質問したり異論を提起したりする。したがって、議論は進行役と発言者の一対一の討論という様相を呈する。これに加え、主題を最終的に決定することもある。進行役は議論の方向性に強い影響力を及ぼすことになる。一方、自らは積極的に発言することを控え、できるだけ多くの参加者から発言を引き出しつつ、参加者同士の意見を噛み合わせることに専念するタイプの進行役も存在する。てつがくカフェ@仙台では、このタイプの進行役が主流である。

いずれのタイプであれ、進行役には困難ないくつかの仕事が課せられる。たとえば、独りよがりな意見を延々と話し続ける発言者に、どのタイミングでどのように介入するかを、進行役は慎重に見極めなければならない。発言者の顔をつぶすわけにはいかないが、発言を放置して他の参加者の意欲をそぐことも避けなければならないからである。

3. なぜカフェなのか？

カフェという場所で哲学の問題を論じ合うことの意味はどこにあるのか。なぜカフェで対話することが重要なのか。それ以前に、哲学カフェの「哲学」は本当に哲学なのか、哲学カフェでの議論は哲学の実践と言いうるものなのか。こうした疑問が哲学カフェには向けられよう。

ソーテは、ソクラテスの活動を引き合いに出し、哲学の本質を、問いを発すること、解決策としてまかり通っているものを厳密に再検討すること、と規定している²。そして、問いかけと吟味という固有の方法論を通じて、個人が自分の問題に向き合う手助けをするところに、哲学の社会的役割は存すると見ている。もともと彼が「相談所」を開設したのも、そうした見方に基づいたものであった。個人が抱える悩みや不安の原因が「心」ではなく、自分の住む街や国、国家間の関係、人類の現状への危機感が原因なのだとしたら、その悩みに対応すべきは、精神療法士である必然性はなく、むしろ哲学者こそがその任にふさわしい³。この信念に基づいて、現実世界に関する通俗的

² 『ソクラテスのカフェ』、60～61 ページ

³ 同書、10～11 ページ

な了解に問いを投げかけ、その妥当性を再考するという作業を、クライアントとともにしていたのである。

ソーテによれば、このように規定された哲学の存在理由は、哲学カフェにおいて検証される。参加者が抱いている様々な具体的問題に、新たな視点を提示し考察を深めることで、哲学はその存在意義を証明しなければならない。言い換えれば、哲学カフェは、視点の提示を行う「哲学者」—研鑽の成果である哲学史の知識や哲学的思考力を議論のなかで積極的に活用しようと試みる者—にとっての試練の場でもある。ソーテは、この試練の場で哲学者が課せられる「受動性」⁴を強調する。哲学カフェにおいては、進行係としてであれ一般の参加者としてであれ、哲学者は自分で問題を選ぶことができず、しかも、文献の知識を正確に駆使すべく十分に準備をする時間も与えられない。ソーテの活動への否定的な反応のなかには、この点を指摘して、主題を限定せずしかも学問的厳密さをないがしろにするような議論の進め方は無責任だ、と批判するものもあった。しかし、ソーテは、哲学教師としての立場ならばともかく、真に哲学的に思考する者としては、準備作業なしに手探りで問題に取り組むのは、むしろ正しい姿だと主張する。なぜなら、現実の問題というのは常に、私たちを不意打ちするように、予想もしない時・場所に現れ、考えることを迫るものだからだ、というのである。人が自由に入出入りするカフェという場所で議論することの意義は、ソクラテスが進んで身を投じた「思考の現場」に哲学を連れ戻す点に存すると言えらる。

このように、ソーテはソクラテスの対話を哲学の真の実践であるとし、その対話は哲学カフェにおいてこそ可能であると考えた。しかし言うまでもなく、ソクラテスの後2千年以上にわたり、数多くの哲学者や哲学研究者がそれぞれの時代に固有のやり方で知的交流を展開してきた。したがって、それらを抜きにして哲学的実践の理想を語るのは独断のそしりを免れないだろう。哲学的実践の価値をはかる物差しを、一種の当意即妙さ、つまり、その場で提起された問題に対してテキストに頼らず考察の道筋を示してみせるというパフォーマンスに、一元化する必然性はない。また、プラトンが描きだす対話と実際の哲学カフェの議論とでは、進行の形態、参加者の動機や相互の人間関係など、本質的な違いが多々あるはずである。ソクラテス的対話を理想として強調すること⁵は、フランスのアカデミズムの現状に対するアンチテーゼとしては有効かもしれない。だが、哲学カフェで交わされるコミュニケーションの独自性を明らかにしようとするなら、ソクラテス的対話のどの側面がそこで継承されているのか、また継承されるべきなのかを具体的に論じる必要がある。

この点に関して、日本の哲学研究者たちは、哲学カフェを企画・運営しつつ、そこでの対話の意義や性質を主題化し、実証的かつ多面的な考察を加えている。日本における哲学カフェの草分け的存在である大阪大学の研究者たちがその代表例である⁶。本間直樹らは、「実践」を「つねに身体と状況をともないながら知を生み出し、運用・伝達する行為一般」と広く定義し、知識を用いての課

⁴ 『ソクラテスのカフェ』、94 ページ

⁵ 「ソクラテス的問いは、暗黙のうちにあった知識を明らかにすることによって、明確で吟味された知識を探求することを意味する。」コプフヴェルグ・ベルリン「ソクラテック・ダイアログの方法論：週及的抽象」(榎本、川上訳)、『臨床哲学第七号』、2005年、大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室発行

⁶ 本間直樹、高橋綾、松川絵里、榎本直樹「哲学カフェ探究 —活動とインタフェイス—」(『大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェースの人文学」研究報告書2004-2006 第8巻：臨床と対話』所収)

題の遂行、常に他者に向けて行為するという意味での共同性、共同行為への参加の習得という意味での学習、の三点を、実践の成立要件に挙げる。このように規定された実践には、哲学の営みを構成する思考と議論の両方が含まれる。それゆえ、哲学の営みはすべて、「社会的実践」として捉え直されることになる。つまり、専門的な研究活動も、非専門家による対話も、ともに哲学に関する実践として、同一の枠組みで捉えられるのである。そしてその上で、「文字の文化と声の文化」、「同質性と異質性」という複数の対比によって、専門的な研究活動と哲学カフェが区別される。哲学の研究者のコミュニティでは、文書の読み書きが重要な位置を占め、議論も文章を介したコミュニケーションが中心となる。そして、議論の相手としては、一定水準の専門的な知識を備えた「理想的な読み手」が想定されている。これに対し、哲学カフェでは、表情や身振りを補助手段としつつも、肉声を交わすことによるのみ、意思の疎通をはかる。また、参加者の知的背景は千差万別であるばかりでなく、参加の動機、議論に期待することも様々である。これらの点で、哲学カフェは研究活動とは異なる。

ただし、本間らは、専門的な研究活動と哲学カフェの連続性の方に力点を置いているように思われる。なぜなら、彼らは、哲学の議論を他の種類の議論から区別する特徴として、問いの定立とその解決において定義や論証のプロセスが重視されることを挙げ、「哲学の議論は、議論される対象の種類や性質によって規定されるのではなく、議論の仕方と営みそのものによって哲学的となる」と述べているからである。哲学カフェでは、確かに、研究者が決して取り上げないような日常生活に密着した問いが選ばれるが、そこでの参加者は、問いかけに含まれる言葉の意味や、議論の進め方それ自体に自覚的であるよう促される。その点では、哲学の専門的な研究活動と共通している。したがって、ソーテが提示する哲学カフェとアカデミズムの対立図式よりも、両者を地続きのものとして理解する本間らのメタ・コミュニケーション的考察の方が、より実情に即していると言えよう。

4. 公共的対話の場としての哲学カフェ

ソーテの相談所のクライアントがそうであったように、人生や人間関係、地域社会や政治の現状、国家間の関係などに関して漠然とした疑問や不安を抱き、それらの問題について他人と話しよに考えたいと望む人はいる。考えたからと言って現実を変えられるわけではない。それでも、誰もが程度の差はあれ関わらざるを得ない普遍的な問題について、他人と意見を交わしながら考えてみたい。これは、人によってはこの上なく切実な願望である。しかし、そのような話題で他人とじっくり話し合う機会に恵まれた人はむしろまれだろう。哲学カフェの存在理由は、そのような機会を提供するところにある。ともに考えることを希望するすべての人に開かれていることが、哲学カフェの理想である。

そして、開かれているがゆえに、哲学カフェには不特定多数の人が集まる。同じ団体が主催していても、参加者の顔ぶれはそのつど変化するので、個々の発言者は常に見知らぬ人びとの前で話すことになる。その点で、相談所での相談や家族やごく親しい人たちとの語りとは性格を異にする

のである。哲学カフェのこうした特徴は、親密な間柄のもとで交わされる対話と比較して、「公共的対話」と呼ぶことができよう。哲学カフェの主催者は、最低限のルール、たとえば、理由や根拠を挙げて自分の意見をわかりやすく伝える、フラットな対人関係を築くよう努める、などを定めている⁷が、これも、議論が公共的なものであることを考慮しての対応である。ここで、公共性という概念が、哲学カフェの活動の重要な一側面を示すものとして浮かび上がってくる。

「公共性 publicness」という言葉を大まかに定義しておこう。齋藤によれば、その意味は、大まかに、①国家に関係する、②すべての人びとに関係する共通のもの、③誰に対しても開かれている、の三つに分けられる⁸。三種の意味のどれが優勢になるかは時代や政治体制と連動しており、両者の関係それ自体が巨大な問題を形成するが、今は脇に置く。ここでは、②と③に注目し、公共性をめぐる歴史的考察を手がかりとして、哲学カフェの現代的意義を明らかにしたい。

a) ユルゲン・ハーバーマス

公共性概念の歴史的変遷を論じる際に必ずと言ってよいほど言及される『公共性の構造転換』のなかで、ユルゲン・ハーバーマスは、17世紀に成立したフランスのカフェやイギリスのコーヒーハウスが、その後登場する公共性の土壌になったと分析している。カフェで行われた討論は対等な人間関係と公開性を特徴としており、その点で、それまでにはなかったタイプの対話、すなわち公共的対話であったというのである。当初、主な話題は文芸や芸術作品に限定されていたが、18世紀の後半には政治をめぐって議論がなされるようになり、この公共的対話は「公論」の形成に寄与する。

ハーバーマスによれば、カフェでの討論の様式には以下のような共通の規準があったという⁹。

1. 対等性の作法

社会的地位を度外視し、相互の平等性を前提する。それゆえ、自らの意見に同意を得るために、社会的地位や経済力にものを言わせることはできない。

2. 合理的意味理解の追求

かつては文学や芸術には教会や宮廷に属する人しか近付きえなかったために、それらの正統な解釈も、そうした特権階級の独占物だった。したがって、その解釈の妥当性が問われることはなかった。しかし、演奏会と同様に、お金を払えばだれでも作品を鑑賞できるようになると、人々はその意味や価値を、議論を通じて、合理性のみを基準として、自分たちで理解し、見定めようとするに至る。そうした対話においては、それまで自明のものとして通用していた見解を問題化することが前提となっている。

3. 非閉鎖性の志向

財産と教養があって、討論の対象となる作品を入手もしくは鑑賞しうる人であれば誰でも、自分

⁷ 西村高宏「「てつがくカフェ@せんだい」活動趣旨」より。

⁸ 齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』（岩波書店、2000年）、viii-ix ページ

⁹ ハーバーマス『公共性の構造転換』（細谷貞雄・山田正行訳、未来社、1994年）、56～57 ページ参照。

たちの討論に参加できるという意識のもと、現実の対話相手を越えた、より広範な公衆の中で自説の展開を試み、自己理解をはかる。

ここに示された公共的対話の基準は、哲学カフェでの対話の原則にそのまま当てはまる。その意味で、哲学カフェは、18世紀に芽生えた討論文化の、現代における再興と見ることもできよう¹⁰。

b) ハンナ・アーレント

政治哲学者のハンナ・アーレントは、人間の「活動力」を、肉体的生命を維持するための「労働 labor」、永続性を備えた人工物を製作するための「仕事 work」、そして多数の人間と関わりながら生きるための「活動 action」、に分ける。そして、「労働」と「活動」を対比的に捉え、前者は家族の領域すなわち「私的領域」に、後者は共通世界の領域すなわち「公共的領域」に属すると規定する。権力や暴力によらず言葉と説得によって物事を決定する行為—つまり政治的行為—である「活動」が営まれる領域は、「公共的 public」であることを特徴とし、その理想形態は古代ギリシアのポリスに見て取ることができる。アーレントはそのように述べ、公共性を次のように定義する。

① 万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示されること。

② 共通世界を意味すること。つまり、私たちがすべてに共通するものであり、私たちが私的に所有している場所とは異なる、世界そのものを意味すること。

ここで注目すべきは、彼女が、共通世界のリアリティを生み出すのは対話である、と述べている点である。

「私たちは、ただ、私生活や親密さの中でしか経験できないようなある事柄について語ることがある。この種の事柄は、その内容がどれほど激しいものであろうと、語られるまでは、いかなるリアリティももたない。ところが、今それを口に出して語るたびに、私たちは、それをいわばリアリティを帯びる領域の中に持ち出していることになる。いいかえると、私たちが見るものを、やはり同じように見、私たちが聞くものを、やはり同じように聞く他人が存在するおかげで、私たちは世界と私たち自身のリアリティを確信することができるのである。」¹¹

私のうちにある感情や信念を、私が自分以外の人びとの前で語るとする。他人たちはそれを聴き、語る私の姿を見、そうして私の発言を共有する。同時に、私は、他人たちの反応を見聞きすることによって、発言が共有されたことを確認する。こうして、発言のなかで言及されている私の感

¹⁰ ただし、ハーバーマスの分析によれば、19世紀半ば以降、公共的対話の場は社会から姿を消していく。というのは、芸術が個人的な消費の対象となり、また、政治の話題も遠ざけられるようになったからである。さらに、20世紀に入ると、文芸的公共性は文化消費すなわちレジャー活動へと変貌し、政治的討論もまた消費の対象となる。例えば、テレビ番組という商品の形をとるに至った討論においては、演出上のルールが最優先され、議論の中身や公開性は犠牲にされる。

¹¹ ハンナ・アーレント『人間の条件』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年）、75～76ページ

情がリアリティを得る、というわけである。その感情が明瞭に理解されないとしても、少なくとも理解すべき何かがそこにあることは告げ知らされる。逆に、言葉を介して他者と共有されることのない感情は、その存在がいまだ不確かなものでしかない、ということになる。こうした指摘は、他者に理解してもらえるかどうか自信の持てない感情や想い、あるいはタブー視され抑圧されている感情や欲望を念頭に置いてみると、いっそう説得力を増すのではないか。

さらに、アーレントによれば、共通世界のリアリティを保証し確実なものとするのも対話である。

「公的領域のリアリティは、・・・無数のパースペクティブと側面が同時に存在する場合に確認される。なぜなら、このような無数のパースペクティブと側面の中にこそ、共通世界がおのずとその姿を現すからである。しかも、このような無数のパースペクティブと側面にたいしては、共通の尺度や公分母をけっして考案することはできない。なぜなら、なるほど共通世界は万人に共通の集会場ではあるが、そこに集まる人びとは、その中で、それぞれ異なった場所を占めているからである。・・・他人によって見られ、聞かれるということが重要であるというのは、すべての人が、みなこのようにそれぞれに異なった立場から見聞きしているからである。これが公的生活の意味である。・・・共通世界の条件のもとで、リアリティを保証するのは、世界を構成する人びとすべての相違にもかかわらず、すべての人がいつも同一の対象に関わっているという事実である。」¹²

個人の内面のみならず、私たちを取り巻く世界に関しても、やはり語ることがリアリティを保証してくれる。ただしそれは、同じ事柄について、すべての人の見解が一致することによってではなく、むしろ、様々に異なる視点から様々な側面が示されることによってであると、アーレントは主張する。見方の違いこそが、同じ世界に現にあって、自分たちはそれに関わっているのだという実感を与えてくれる。つまり、他人によって自分が気づかなかった側面が示されることで、世界のリアリティは増していく、というわけである。たとえば、ある社会問題についての人びとの考え方は異なっても、ともかくそれについて様々な立場から大勢の人が意見を述べることで、その問題が現に存在し、直視すべき問題であり続けているという事実のリアリティだけは失われることはない。観点が多様であればそれだけ見解の一致は困難になるが、他方で、その観点が関わる事実はそのリアリティと重要性を増すのである。

このように、語りあうことによって共通の世界を開き、さらには様々な意見をもつ人がその議論に参加することで世界のリアリティを固めていく、というところに、アーレントの考える公共性の核心がある。

¹² 『人間の条件』85～86ページ

5. 参加者は議論から何を求めるのか

哲学カフェを社会的実践もしくは「市民活動」として見た場合、それはハーバーマスやアーレントが考える意味での公共性を理念として志向するものであり、一定程度はそうした公共性を実現していると言えよう。

ただし、一回一回の議論が成功したと言えるための基準は、理念としての公共性とは別に求められるはずである。では、成功した議論、端的に「よい議論」であるための基準とはいかなるものか。参加者がどのような体験をなすとき、よい議論がなされたと言えるのか。

まず確実に言えるのは、多様な意見が出されるにつれて議論が紆余曲折するそのプロセスを参加者が実感できているかどうか基準となる、ということである。なぜなら、先に述べたように、哲学カフェの第一の目的は、満場一致の結論を得ることではなく、議論が一段階深まるその瞬間に注意を払いつつ、その変化を味わうことに存するからである。では、議論が深まるとは具体的にはどういうことか。それは、新たな発言をきっかけとして、参加者全員がそれまでの議論を振り返り、それまで自分たちが不問に付していた前提を改めて問い返す、そのときに起こる。同時に、議論が本当の意味で、個々の参加者にとって自分のものとなり、リアルな問題となるのも、この深まりによってである。

この深まりは、ソクラテスの「助産術」が目指していたものでもある。助産師はお腹の中の子供を外に引き出して、その体に異常がないか検査する。ソクラテスは自らをこの助産師に例えた。自分は、人びとの意見を吟味する際、相手の発言から、隠れた目に見えない含意を抽出する。そして、その含意を明るみに出して検査されるようにするのだ、と。ソーテがソクラテスの対話を理想としたのも、ソクラテスのこの方法論の有効性を確信していたからである。アーレントは、この助産術を、批判的思考の起源と見なす。そして、近代における批判的思考の代表者であるカントは、助産術の意義を余すところなく自覚していたとして、カントを代弁して次のように述べる。

「人が批判的思考の術を学ぶのは、正確には、批判的な諸規準を自分自身の思想へ適用することによってなのである。そして人はこの適用を、公開性なしには、すなわち他の人びとの思考との接触から生ずる試験なしには、学ぶことができない。」¹³

ここで、批判的な規準が「自分自身の思想へ適用」されると述べられている点を見落としてはならない。他者を批判する以前に、自分あるいは自分たちの思考、問われることのない前提、いわゆる予断に基づく不確かな思考を批判することが重要で、その批判の視点を得るためには、他者の存在が欠かせない。言い換えれば、他者の存在が自己批判の条件をなしているというわけである。複数の人間が対話を介して思考することの意味は、他ならぬこの点にある。

¹³ ハンナ・アーレント『カント政治哲学の講義』（浜田義文監訳、法政大学出版局、2009年）59～60ページ

終わりに

先述したように、哲学カフェにおける対話は哲学的実践の一つの形態であり、その限りで普遍的真理を志向するものである。しかし実際には、そうした理念の実現を妨げる要因は常に存在する。たとえば、安易な相対主義的解釈がその一例である。ある事柄について自分とは異なる見方が提示され自分が問わずにいた前提に気づいたとしても、参加者個人が、その事実を、両立不可能な見解の相違、したがっていかなる調停の試みも無意味な相違の露呈として理解し解消してしまうなら、普遍性へ向けての歩みはそこで止まってしまうだろう。だからこそ、異なる意見の「すり合わせ」が必要となる。では、そのすり合わせは、参加者個人の内部で、具体的にどのような仕方でなされるのか。また、ある個人の見方が議論を通じて客観性を増したという事実は、いかにして確認されるのか。哲学カフェに向けられるこうした問いに答えるためにも、まずは、客観性ないし普遍性についての何らかの規定が、ゆるやかであっても参加者の間で共有されている必要があるだろう。そして、議論進行の形をデザインするに当たっては、客観性の度合いを高め、かつ高まったことを参加者が確認できるような仕掛けを組み込んでいくことが重要になると思われる。

